

ピースメッセージ #1

UA ゼンセン I・M さん

初めて長崎での「平和行動」に参加させていただきました。

1 日目連合 2025 平和ナガサキ集会の被爆者からの訴えて羽田麗子さんの話を聞いて、今年は原爆が投下されて 80 年がたちますが、今でも被爆者や遺族の傷が癒えていないのだと、実際に体験された方の話を聞いて感じました。実際に体験された方から話を聞くと、当時の情景が生々しくよみがえってきたように感じました。

原爆の被害にあわれた方が高齢になり、語り継ぐ方の高齢化などで次世代に語り継げる方が少なくなっていることも課題となっています。平和行動に参加した私たちが今後戦争は二度と起こしてはいけない、核兵器は使用させてはいけないことを子供や孫の代までずっと語り継いでいかなければならないと思いました。

長崎の原爆に関する知識は社会の授業で習った程度しかない私でしたが、ピースウォークで実際の被爆地や、原爆資料館などをまわらせていただき、実際に自分の目で見るとテレビや教科書から伝わらない重さを体感しました。

日本国内では 80 年戦争は起きていませんが、世界中のどこかで戦争は起き続けており、いつ核兵器が使われてもおかしくない状況にあります。私は平和行動に参加させていただいたことを少しでも多くの方に伝えることで、戦争や核兵器の悲惨さを伝え、平和の大切さ、平和は当たり前じゃないことを伝えていきたいです。

多くの方に伝えることで「ビリョクだけど、ムリョクじゃない」ということを体現できたらと思っています。

貴重な機会をいただきありがとうございました。

連合平和行動2025

ピースメッセージ #1

JR 連合 Y・T さん

2025年8月8日(金)~9日(土)に行われた2025平和行動 in 長崎に参加しました。

このイベントは大きく3つのイベントがありました。

1つ目は被爆体験や核兵器の現状の講話などの平和アピール集会への参加、2つ目は原爆犠牲者慰霊平和式典へのリモート参加、3つ目は慰霊碑巡りです。

この中で1番印象に残ったのは、被爆体験の語り部の方の話です。

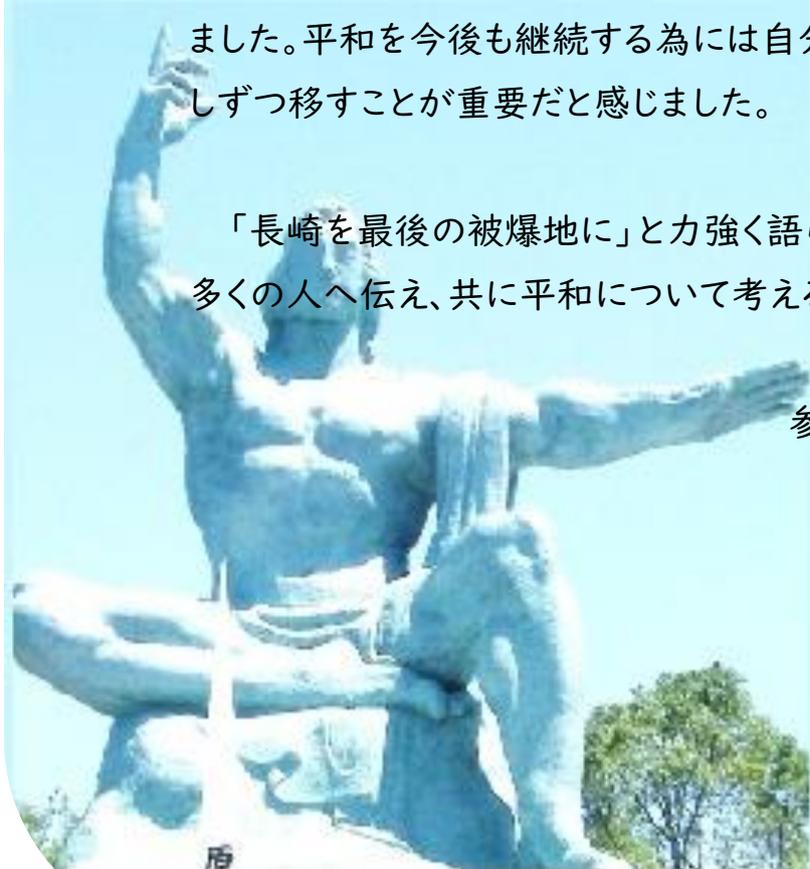
戦後80年がたち被爆された方のお話はその時のリアルが伝わってきました。

今、普通に生活していれば耳に出来ない話などを聞かせていただきました。

自分自身、普段が平和だから平和について無関心になっていたのを気づかされました。平和を今後も継続する為には自分ができることをまずは考え、行動に少しずつ移すことが重要だと感じました。

「長崎を最後の被爆地に」と力強く語られた多くの方たちの気持ちを少しでも多くの人へ伝え、共に平和について考える仲間を増やし、平和を守る努力をします。

参加させていただきありがとうございました。



連合平和行動2025

ピースメッセージ #2

JR 連合 U・Nさん

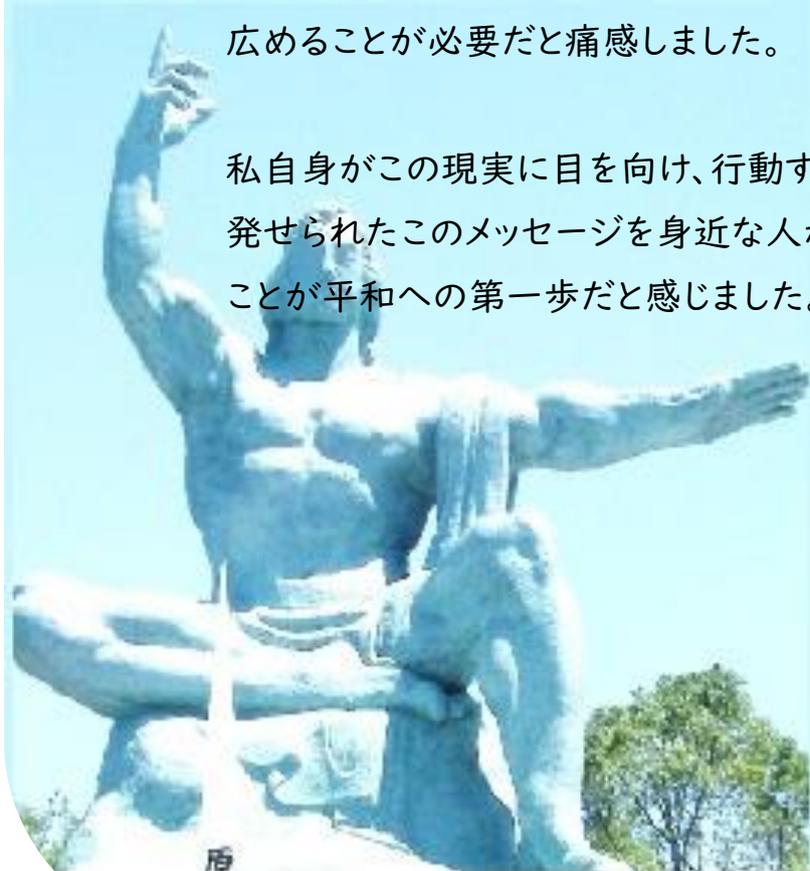
長崎の平和行動に参加し、戦争と核兵器の悲惨さを改めて実感しました。

被爆者の証言や平和祈念式典を通じて、1945年に長崎、広島で起きた出来事がいかに多くの命を奪い、深い傷を残したかが胸に迫ってきました。

平和祈念式典で鈴木長崎市長が故・山口仙二さんの国連本部での演説の内容の一部である「ノー・モア・ヒロシマ ノー・モア・ナガサキ ノー・モア・ウォー ノー・モア・ヒバクシャ」を心の底から叫んだのを聞いて未来への強い決意を示すものだと感じました。

核兵器のない世界を目指すためには、過去の悲劇を語り継ぎ、平和の尊さを広めることが必要だと痛感しました。

私自身がこの現実に向け、行動することの重要性を強く感じ、長崎から発せられたこのメッセージを身近な人からでも良いので語り継いでいくことが平和への第一歩だと感じました。



連合平和行動2025

ピースメッセージ #2

UA ゼンセン T・Kさん

2025年8月、被爆80年の節目に「平和行動 in 長崎」に参加させていただいた。

私の出身である長崎の地で改めて平和について考える機会をいただけたことに感謝の念が尽きない。「平和ナガサキ集会」、「平和記念式典」の講和を拝聴した際に、80年という時の流れを感じたことが印象に残っている。

私たちの世代では、戦争を直に体験した方から直接ご講話いただける機会を当たり前のように設けて頂けていたが、その多くが亡くなられた今、直接聞くことのできるありがたさや、今後、原爆や戦争について下の世代に伝えることの難しさを感じた。

この80年の節目は「伝える」ことの在り方を転換しなければならない年という意味でも節目であったように思う。「ナガサキ・ユース代表団」や「高校生平和大使」に代表される平和に向けて活動される若者も自分たちの言葉で伝え、立派に活動していた。

毎年8月6日と8月9日は平和について考えを巡らせたいと思うと共に、この文章を読んでいる方へも、そうしたきっかけになればと切に願う。

